原田信一先生を送る

坪　井　　健

本年3月末日をもって社会学科は、永年、社会福祉学の研究と教育に携わってこられた原田信一教授を定年退職でお送りすることになった。原田先生は、昭和45年4月社会学科の非常勤講師として駒澤大学の教壇に立たれた後、2年後の昭和47年4月から専任講師として勤務され、助教授、教授と、今日まで29年の長きにわたって学部・大学院で多くの学生を指導してこられた。平成5年から2年間は、大学院人文科学研究科社会学専攻主任の重責を務められただけでなく、学内でも文学部を代表されて国際交流委員、教務部委員などの要職を歴任されている。

先生は、駒澤大学に着任される前に、オクスフォード大学に短期留学をされているが、駒澤大学に着任後も、今日のように駒澤大学海外研修制度が完備される前、非常に早い機会にアメリカのラドガース大学に2年間留学をされた経験をお持ちであり、そうした経験を通して児童福祉、特に障害児の福祉教育に幅広い学識を発揮され、学生指導をされてこられた。先生の薫陶を受けた弟子たちは、今日では本学教員を始め、全国各地の教育や福祉の現場で活躍している。先生の障害児への暖かいまなざしは、弟子たちにも注がれているようで、先生の教え子はどことなく先生のやさしさを引き継いでいるようにも見受けられるのは思い過ごしであろうか。

私個人は先生と専門を異にしていたので、直接、学問的薫陶を受ける機会がなかったのであるが、先生が非常勤として駒澤大学の教壇に立たれた頃、私は学部の学生として同じ社会学科に籍を置いていたし、私の大学院入学と先生の

専任として着任が同じ年ということもあり、研究室の懇親会などで顔を合わす機会も多かった。原田先生の駒澤大学での29年間は、私の研究者としての歩みの29年間と歩調を合わせていることになる。

原田先生は、本籍が岡山県で、私と同郷という縁もあり、ことさら親しくして頂き、大学院の宴席の帰りなどに「がんばりなさいよ。期待していますから。」と熱い言葉をかけてもらい、私の手を力強く握って頂いたのを昨日のことのように覚えている。私には、個性派ぞろいの研究室の教員の中で、原田先生の控えめな紳士ぶりが気に入っていて、「私は先生に次いで紳士でありたい」と口癖のように言っていた。同じ岡山県出身とは言え、原田先生と違い、私は一本気で気短かな性格なのでとても真似はできないのだが、先生を「しなやかな」紳士モデルにしていたことも確かである。

近年、私も先生の近くに転居したご縁でお宅にお伺いしたこともあるが、そうした機会に気付いたことは社会学で言う「文化資本」の差である。原田先生の立ち振る舞いは先生一代のものでなく、由緒正しい家柄をお持ちの原田家ならではのものであり、とても真似はできないということである。原田先生をモデルにしようとしたのは私の誤りであり、私自身社会学の勉強不足であった。

私が学科主任になってからも、先生には暖かい励ましを頂き、何かと気を使ってくださることが多く、いつも頭の下がる思いがしているが、これからは、そうした機会が失われ、私としては寂しい限りである。

しかし、駒澤大学はもちろん、私も原田先生も引っ越すわけではない。地理的距離は同じである。是非、今後とも駒澤大学に気楽に来ていただき後輩たちに暖かい言葉をかけて頂ければと願っている。われわれも先生のためにそういう機会を積極的に作っていきたいと思う。まだまだ、お若い先生のこと。今後ともお元気でご活躍くださることを期待しています。